

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

佐々木 雄一

【所属】(助成決定時)

東京大学

【研究題目】

日本外交における論理の転換と政治指導

【研究の目的】(400字程度)

近代日本外交を分析すると、個々の政策決定の背景でそれを規定する言説がしばしば転換したことがわかる。そうした論理の転換の過程と原因を長期的に分析しつつ、新たに満州事変前後に関して調査・検討するのが研究目的である。従来、日本の対外膨張や戦争というと1931年の満州事変以降の歴史が、またその原動力としては軍国主義や軍の巨大な権力が想定されてきた。しかし本研究は、政府内の論理と通常の政策決定過程のなかに対外膨張の主因が存在したと想定しており、言説や論理が政策を規定していく過程とその転換の模索を分析することを目指した。そしてより広い視野から見れば、現代に通ずる政治制度や機関、豊かな研究上の蓄積と資料が存在する近代日本の政策決定過程分析を通じて、政治指導者はいかにして合意を形成し、合理的な政策を決定・遂行することができるのかという点で、現代世界の課題解決にも示唆を与えることを目指した。

【研究の内容・方法】(800字程度)

上記の目的を達成するため、まずは日常的に刊本やインターネット上で閲覧可能な資料に当たり、東京近郊の資料館で資料調査・閲覧・複写を行うというのが基本的な研究方法となる。それにより、個々の政策決定過程を、そして世論の動向を明らかにした。

また以前から、イギリスの資料を用いることで日本の外交方針や個々の政治指導者・外交官の考えを分析するという研究方法を用いており、本研究に関してもイギリスで資料調査を行った。

より具体的な研究内容・方法としては、例えば1890年代後半以降、日本政府の論理は、満州がロシアの支配下に入ったうえで相互利益の観点から日露は妥協可能、というものから、ロシアによる満州占領は韓国独立の危機であり日本の危機、という論理に転換し、その結果、日露戦争前の交渉において日本政府が妥協する可能性は著しく低下した。それ自体は日本の資料からのみでも読み取ることができるが、イギリス側の資料と突き合わせることで、外交の場における言明のなかから日本政府の論理が醸成されていく過程を明らかにすることができた。また、日本の拠って立つ論理はいかなる国際規範のなかで形成され、どのように説得力を持っていたのかという点も、イギリスの外交文書・個人文書を精査することで示すことが可能になった。1920年代から1930年代にかけての世論については、東京及び各地の主要紙、主要雑誌のほか、海軍協会会報、『海之日本』、『後援』など陸海軍関係の雑誌も通読した。

以上の研究内容については、博士論文を『帝国日本の外交 1894-1922 なぜ版図は拡大したのか』（東京大学出版会、2017年）にまとめる際、随所に取り込んだほか、日本国際政治学会研究大会、EAJS2017, 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies 等でも関連する報告を行った。

【結論・考察】(400字程度)

まず、外交と(国内の)対外政策決定過程との連関、あるいは相互作用というものを浮かび上がらせた。すなわち、その時々为国益計算に基づいて政府方針が決定され出先で徹底されるわけではなく、外交交渉上の有用性からある言明がなされるとそれが日本政府内に還流して日本の方針となっていく、時の経過とともに

に固定化され、日本の不動の外交方針となるという回路を見出した。これは、元々は日露戦争前の論理転換というところで気づいた点だが、例えば新四国借款団をめぐる応答から満州をめぐる論理が確立する過程など、他の例でも当てはまる。現代まで、そして外交以外の分野も含めて論理による政策の規定という観点からどこまで意義のある研究をできるかについては今後の検討課題としたい。

もう一つ大きな発見は、長期的に政策内容を拘束していく日本側の論理が、第一次世界大戦前後まで、イギリスの判断様式と合致していたということである。その点に関して、「戦後七〇年と明治一五〇年の間で『帝国日本の外交 1894-1922』に寄せて」（『UP』46巻6号、2017年）でも若干触れたが、詳しくは2019年に論考を発表予定なので、引き続き研究を深めていく。

以上のように、本研究助成を得て日本外交における論理転換をめぐる長期的分析は大きく進展し、また1920年代から1930年代にかけての世論に関して揺らぎや多様な可能性があるなかから満州事変を機に一気に収斂していくという仮説も裏づけられた。他方で、同時期の政治過程・政策決定過程と世論との関係性の変化や相互作用については十分な研究成果を得るに至らず、今後さらに検討したい。